www.wako.ac.jp/organization/gender/

vol. 27
2016年4月発行

# GF通信
ジェンダーフォーラム
GENDER FORUM PRESS
女とは? 男とは? 考えるマガジン

和光大学　ジェンダーフォーラム　〒195―8585　東京都町田市金井町2160 和光大学ジェンダーフリースペース(G112)　TEL 044―989―7777　内線4112　gen-free@wako.ac.jp

GF EVENT

## 映画『何を怖れる～フェミニズムを生きた女たち～』上映会&井上輝子先生のトーク

2015年11月7日（土）に『何を怖れる』映画上映会および井上先生のトークイベントが開催された。公開講演会として今年度二度目に当たるこの催しは、映画上映の後、映画に出演されている井上先生のトークという充実した内容だけあって、市民の方々が多数つめかけてくださった。

1970年のウーマン・リブ誕生から40数年がたつ。『何を怖れる』は、フェミニズムの第一世代として果敢に第一線を駆け抜けてこられた田中美津、米津知子、滝石典子、上野千鶴子、井上輝子、樋口恵子、加納実紀代、池田恵理子、高里鈴代、田中喜美子、中西豊子、桜井陽子の12人に松井久子監督が迫った記録映画である。12名の方々は、それぞれの仕方でフェミニズムに関わる人生を生きてこられた。松井監督によれば「フェミニズムとは女の生き方」である。彼女たちが身体を張って歩んできた「フェミニズムという人生」を語る姿には静かながらも熱い昂奮と、戦って何かを勝ち取ってきた人たちに共通の凛とした矜持があってまばゆい。男性中心社会の規範に異議申し立てをした、という言い方をすれば仰々しいが、しかし彼女らは自由に爽やかにそんな大それたことをやってのけたように、今その経験を語る姿は楽しげだ。

顧みるに筆者が中学生の頃だったか、フェミニズム運動の祖形として筆者が認知したものは中ピ連と呼ばれていた。当時は連合赤軍の浅間山荘事件でもって全共闘が終息しかけていた頃。中ピ連は左翼運動の延長線上に生まれ、草創期のウーマン・リブ運動はある種のいかがわしさと共に捉えられていたと言えよう。しかしその後、映画で取り上げられた12人の女性たちが男たちの、さらには女たちからさえも放たれた批判や攻撃をものともせずに最前線を切り開いてきた過程で、いつしかウーマン・リブという呼称はフェミニズムという言葉に取って代わられていた。ウーマン・リブ運動は、「ブスでもてない女たちのヒステリー」だとしてバカにされていたと松井監督は言う。これに携わるのは容姿に恵まれない可哀そうな女たちか、男社会を敵に回す怖い女たちくらいだと思われていた。しかし、この映画に登場する賢く、勇敢で心優しい先輩の女性たちが、未踏の地に道を切り開いてくれたお陰で、私たちは今、フェミニズムやジェンダーという言葉が当たり前にあり、大学で学問として学ぶことのできる社会に生きている。彼女たちが語るこの間の奮闘の過程は、まさにそれ自体が同時代史の貴重な証言でもある。

映画にも登場される井上先生は日本のフェミニズム研究を率いてこられた先駆者である。手前味噌だが、わが和光大学が、そんなフェミニストの草分けの方の研究と教育の場であり続けたということを改めて誇らしく思った次第である。

（宮崎かすみ・総合文化学科）

▲上映後のトークセッション

GF EVENT

# 市民講座『これって、デートDV？』

町田市男女平等推進センターによるデートDV防止啓発講座が、2015年11月19日（木・5限）に和光大学で行われました。徳永貴志先生の「法と人権」の受講者を中心に約150名が参加しました。講師は、昨年に引き続き、深沢泰子さん（アウェア認定ファシリテーター）です。

▲デートDVについて講演する深沢氏

寄せられた感想には、「暴力」は身体的なものに限らないと知ったことで自分や友人に起きていることが「DV被害／加害である」という認識を得た、という体験談が目立ちました。そうした状況を変えるために一歩踏み出したい、という感想も少なくありませんでした。以下でその一部を紹介しましょう。

授業で視聴した映像で、被害者の女の子が「私が拒否したからいけなかったんだ。彼、怒ってるし嫌われたかもしれない…」と言っていました。私はその女の子の気持ちがすごくよくわかりました。彼が言うことに「そうだよね、ごめんね」と言っていれば事が大きくならないので、相手に合わせていればいいと思っていました。でも、自分の気持ちに誠実になることが今後の自分たちのためにもなることがわかりました。一度「今後もこういう傷つくことも言われ続けるなら耐えきれない」とさりげなく別れを告げるようなことを言ったことがありますが、威圧され、彼の反応が怖くて言えなくなりました。でも別れたいわけではなく、優しくなってほしいと思うだけです。エスカレートする前に、相談電話をかけてみたくなりました。

DVについて知っていましたが、中身についてくわしく知ったのは今日の講義が初めてです。DVは身体的なものばかりと思っていましたが、精神的・経済的・性的暴力のようにいくつもあること、女性だけが被害者になりうるとはかぎらないことを知りました。物を投げつけて自分がどれだけ怒っているのかを音で表しているというお話がありました。私もそういうふうにされた経験がありますが、物をぶつけて怒りを示しているその人が悪く、その人が感情をコントロールできていないだけであって、自分は何も悪いことをしていない、ということを理解することができました。相手が怒っているのは自分のせいだと考えなくてよいのだと知れてよかったです。誰でも加害者になりうると学べてよかったです。そして自分の感情に責任をもつことというお話が心にしみました。

LINEの中身をチェックされ、休みの日の行動を制限されてしまっている友達がいて心配していました。今日の講演を聞き、少し勇気を出して「大丈夫？」と声をかけてみようかなと思いました。

デートDVという言葉はよく聞きますが、このように時間を取って真剣に考えたことはありませんでした。「自分に危害を加えてくる人となぜすぐ別れないのだろう…」と疑問でした。しかし「相手には自分が必要に思った」「相手の対応が怖かった」などの被害者の気持ちを知り、簡単に離れられないことがわかりました。暴力の種類が大まかに4つに分類されているのは、それだけデートDVが慢性化し、パターン化することを示しているのだと思います。「つき合う→男性は男性らしく見られたいし、女性は女性らしく見られたいと思う→力関係が生まれる→デートDVへ」という流れにも納得しました。自分が「こうなりたい」と思う関係の延長線上にあるから、簡単に断ち切ることができない。簡単に別れると決心できる人のほうが珍しいでしょう。防止策はいくつも思いつきますが、実際に被害が発生したあとにできる行動は「自分の意志を伝える」ことが中心になっています。ここに解決が難しい理由があると思います。結局は本人が動くしかないのです。本人が恋愛相手との世界に浸っていたら、行動を起こすことは難しいと思います。そう考えると、いちばん大切なのは、自分の状況を客観的に見ることなのかもしれません。

デートDVの問題の根底には、ジェンダーバイアスがある。「男性らしさ」「女性らしさ」という世間の常識が私たちに根づいていて、それがデートDVの原因のひとつになっている。男性だから強くたくましくなければならない、女性だからおとなしくひかえめでなければならない、という思い込みが問題なのである。つまり、この問題は私たちの身近にあり、誰にでも起こり得るということなのだ。デートDVの加害者にも被害者にもならないためにはどうしたらよいのだろうか？　それには

ジェンダーバイアスから自由になることが必要だと感じた。日頃から男性に男性らしさを、女性に女性らしさを求めることをやめるべきだ。

力による支配が世の中を覆っているということについて考えさせられました。国による暴力なのだから許されるものではないというお話もありましたが、その最たるものの一つである死刑制度がまだ日本に残っていることについても、これでいいのかという気持ちになりました。力による支配は世界を覆っています。紛争を解決するために今も軍事力が使われています。テロも暴力ですが、空爆も暴力です。暴力の連鎖が一層の悲劇を生むこと、暴力では解決できないことが明らかになってきています。DVのような身近な暴力を考え人権尊重の考え方を広げていくことと、暴力のない平和な世界をつくることはつながっていると思いました。

（**杉浦郁子**・現代社会学科）

GF EVENT

## 映画『メトロレディーブルース』と日本の非正規労働

2015年12月9日、地域の方々にも呼びかけ、「文化とメディアの社会学」の授業の枠を利用してドキュメンタリー映画『メトロレディーブルース』を見る公開授業を開いた。制作した松原明さんと佐々木有美さん、映画に登場した地下鉄売店で働く女性＝「メトロレディー」たちをお招きして、非正規労働の問題点と、これにどう対抗していくかを話していただいた。

大学を出れば、ほとんどの人が働いて生活を立てていくことになる。にもかかわらず学生の多くは、大学にいる間は、その実感はほとんど味わえていないのが実態だ。そこで労働映画を通じて、働く現場では何が起こりうるのかをリアルに知ってほしいと始めたのがこの授業だ。

▲制作者とメトロレディーたちのトーク

メトロレディーたちは、同じ仕事をしているのに正規と非正規とで労働条件に大きな差がある。賃金は正規の半分以下で、何年働いても上がらない。退職金もない。65歳の定年だけは正規並みだ。このような日本の非正規は、「女性は夫に扶養されているので安くても不安定でも大丈夫」という考え方を利用して、経済的自立が難しい低待遇に据え置かれてきた。それがいまや若い男性にまで広がっていき、また、女性の登用が進むと同時に、女性同士でも正規と非正規とで大きな差がつくようになった。日本は「同一労働同一賃金」がほとんど整っていない社会なのだ。

▲竹信先生の解説

学生からは、「中高年の非正規の女性がストをやったと知り、ストを身近に感じた」「労働問題とはどこか遠くのものではなく、地下鉄の売店など日常的な場に起きていることに驚いた」という感想があった。また、「不当だと思ったら声を上げることの大切さを実感できた」という声も少なくなかった。「女性だから安くてもいい」という不公正を認めてしまえば、やがてはそれが男性にも回ってくるということも重要なポイントだ。

大学を出る前に、働くことについてじっくりと考えてみる体験を、これからも授業の中でつくっていきたい。

（**竹信三恵子**・現代社会学科）

# 2015年度卒論発表会

2016年1月20日（水）にジェンダーフォーラム主催の卒論発表会を開催し、今年度は4名の4年生が報告をしました。発表の内容を簡単に紹介します（発表順）。

**（1）和泉甫昌さん（総合文化学科）『旅する女性たち――江戸時代の旅の記憶から』**

和泉さんは「江戸時代の女性の旅」がどのような経験だったのかを分析しました。旅の歴史は、主に男性が残した資料にもとづいて語られてきたそうです。女性たちの旅の記録の発見が大きく遅れたのは、研究者たちが「江戸時代、女性に自由などまったくなかった」という先入観をもっていたことも一因でした。しかし、1990年代に入ってようやく、江戸期の女性たちが書き残した旅日記が掘り起こされるようになります。和泉さんは、江戸の裕福な商家の嫁であった中村いとの旅（1825年）と、勤王の志士としても知られる武士清川八郎の母の旅（1855）の記録をとりあげ、女性ならではの旅の経験を記述しました。興趣が尽きない内容で、フロアから多くの質問が出ました。

**（2）森山有希さん（現代社会学科）『性別が「分かる」ことは、何をもたらすのか』**

森山さんの研究は「この社会では誰もが『男』か『女』いずれかの性別を割り当てられ、出生時に女（男）と判断されれば、それに付随した女（男）の役割が“自然”のものとして遂行されると思われている」という観察を出発点にしています。このように二元化され自然化されている「性別」というものが、私たちの日常にどのように関与しているのか。そのありようを詳細に記述するために、森山さんは、ジェンダーをめぐる経験を聞きとるインタビューを行いました。その結果、私たちは日常的なやりとりにおいて他者の行為がその性別にふさわしいかどうかを絶えずモニターしていること、それによって性別秩序が維持されていること、しかしその秩序への抵抗もなされていること、などが明らかにされました。

**（3）横溝智加さん（総合文化学科）『東電OLとジェンダー』**

横溝さんが注目した「東電OL殺人事件」は、1997年3月に東京都渋谷区円山町にあるアパートで女性が殺害された未解決事件です。被害者の渡辺泰子さん（1957年東京生まれ）は、慶應義塾大学を卒業後、東京電力に初期の女性総合職として入社したエリートで、退勤後は路上で客を勧誘し売春を行っていました。週刊誌やワイドショーは、昼は一流企業の社員、夜は渋谷で「立ちんぼ」という二面性への好奇心にまかせて泰子さんの経歴や人間関係を暴きましたが、そうした報道に触れた女性たちから「他人事とは思えない」「これは私だ」と泰子さんに共感を寄せる声が上がったそうです。横溝さんは、そうした共感の背後に何があるのかを考察し、複数の男性との交際や性的関係によって、女性たちが「親の呪縛」からの解放を試みる側面があることを論じました。

▲GFSでの卒論発表会

**（4）沖春菜さん（総合文化学科）『「萌え」の研究』**

沖さんの卒論は、オタクの「萌え」の感情や表現はフェミニズムに誤解されているという現状認識にもとづいて、「萌え」とフェミニズムとの親和性が高いことを論証しようとするものでした。「萌え」を「男女の性差を超えてその人そのものを愛でる考え方」だと定式化したうえで、「萌え」がバッシングを受けるのは男女平等に反するからではなく、「恋愛資本主義」（本田透著『萌える男』ちくま新書、2005）にとって都合が悪いからだという仮説を立てました。フロアからは、この仮説の発想力が豊かである点に評価が上がる一方で、仮説を論証するための具体的なエビデンスが積み上げられていないことが残念だという指摘もありました。

今年度の発表はいずれも着眼点がすばらしかったです。ただ、紙幅や時間が限られている卒業論文で説得的な議論をするためには、スケールの大きい問いを論証可能なところまで縮減することが重要になります。教員一同このことを再確認しましたので、今後の論文指導に活かしていきたいと思います。

（**杉浦郁子**・現代社会学科）

DISCUSSION

# GF読書会：高群逸枝と橋本憲三の夫婦関係をどう見るか

2015年度後期は、山川菊栄、高群逸枝の自伝を読んだ。筆者は、山川には都合がつかず出席できなかったため、高群逸枝の『火の国の女の日記』（以下『日記』）について書く。

高群逸枝といえば、日本における女性史を打ち立てた在野の女性研究者として高名である。が、女性史研究者はともかく、女性学やジェンダー分野の研究者でも、大著の『母系制の研究』や『招婿婚の研究』を読み切っている者はそれほど多くないようだ。恥ずかしながら筆者は、今回『日記』を読むまで、高群に纏わる様々なエピソードすら知らなかった。

読書会では、高群と夫の橋本憲三との関係を巡って、熱く議論した。二人の関係は、これまで「高群の仕事を陰で支える憲三」という、憲三の「内助の功」を賞讃するものが多かった。しかし、『日記』を読むと、憲三が「暴力に訴え」、高群が自責の念に駆られるなど、見過ごせない表現が出てくる。「これは、DVでは？」と疑いを持ちながら読み進めると、それらしい記述が散見されるのだ。『日記』は、高群が書いたものを憲三がすべて目を通し、後半は高群逝去後に憲三が記したとされることから、これらの事実関係を憲三は認めているはずだ。しかしなぜ、これまで、高群と憲三の夫婦関係をDVとして読み解く主張がそれほどされてこなかったのだろうか。興味が湧いた。

高群が憲三と生きた時代では、2016年に生きる私たちが「暴力」と捉えることも、「一般的な夫婦関係にはあること」と受け入れられており、「妻に好きな学問を許している寛大な夫」との評価が出てくる土壌があったのだろうか。

読書会では、「DVではないか」との見方を巡り、様々意見を交わした。「DVであれば、許されない」との人権感覚は共有できていたと思う。しかし、何をもって夫婦のあり方に「DV」を見るのかは、簡単ではない。特に、高群と憲三の関係は、高群の学問的偉業に結実したがゆえに、判断が難しくなるようにも思える。いつか取り組みたい課題がまた増えた。

（**池橋みどり**・GF読書会メンバー）

▲じっくり楽しく勉強する読書会

▲河野信子『火の国の女　高群逸枝』（新評論、1977年）より

TOPICS

# 日本のマンガ・アニメにみる家族の表象

2015年12月22日（火）、GF読書会のメンバーであり、日本のマンガ・アニメを研究している文化社会学者・足立加勇さんに和光大学「比較家族論」（担当者：馬場淳）のゲスト講師としてご登壇いただきました。歴代のマンガ・アニメの視聴覚資料を縦横無尽に用いながら、受講者30人を魅了しました。以下は、その内容です。

多くのマンガ・アニメ作品において、「戦い」は血湧き肉踊るものとして描かれてきた。その中で、家族は、戦士を再生産し、「戦い」を肯定する価値観を継承するためのシステムとして機能してきた。日本のマンガ・アニメの主人公には、父の想いを受けつぐ息子たちが多数存在する。

だが、この家父長制的な家族システムは、70年代後半頃、困難に突き当たる。この時代のアニメ作品におけるリアリズム志向は、父というものに受けつぐ価値がないことを暴露してしまう。『機動戦士ガンダム』の主人公アムロと、戦えと彼を叱咤する父テムの気持ちは、すれちがったまま交わることはない。受けつぐべきものを失った息子は、孤独に苦しむ。この父と子の断絶は、『新世紀エヴァンゲリオン』でも取り上げられ、孤独は作品のテーマとして前景化される。その孤独を癒すべく、作品はオカルトへと傾斜していく。

このようなオカルトへの傾斜は少女向け作品にもみられる。『美少女戦士セーラームーンR』の主人公、月野うさぎは超古代の月の王女の転生であり、未来において千年王国を実現する存在である。この作品の映画版に登場する戦士たちは、敵も味方も孤独に苛まれており、救世主であるうさぎは皆を癒す超越的な母性とされた。父ではなく母だ、という点において、彼女は、少年主人公たちと異なる。しかし、その母性は、彼女に対する盲目的信仰を人々に促すものであり、この信仰は人を「戦い」へと駆り立てる力となる。

日本のマンガ・アニメは人間関係によって人を「戦い」へと駆り立てるメカニズムを作中に取り入れてきた。家族もまた、人を「戦い」へと駆り立てる力となりうる。そうなることを防ぐためには、家族に対し、より多様で自由なイメージを持つことが必要であろう。

▲映画『さよなら銀河鉄道９９９』（1981年）より

人を「戦い」へと駆り立てるメカニズムの詳細については、私の博士論文『日本のマンガ・アニメにおける「戦い」の表象』(http://glim-re.glim.gakushuin.ac.jp/handle/10959/3642)をお読みいただきたい。　（**足立加勇**・GF読書会メンバー）

今回、現実と切り結びつつ相互作用するマンガ・アニメの可能性を改めて考えさせられました。とくに家族が人を「戦い」に駆り立てるという足立さんの指摘は、「フェミニズム」とは異なる切り口から、家族のもつ「明るい」イメージを相対化するものと言えます。また戦前の「家族国家観」や暴力団の親分―子分関係など、「家族的なもの」と「戦い」の直接的／間接的な連関が現実社会でも看取されることを踏まえれば、足立さんのご研究がマンガ・アニメの世界を越える広がりを持つと言っても過言ではないでしょう。

（紹介者：**馬場淳**・現代社会学科）

GF SCHEDULE

# GFのイベントと読書会のお知らせ

**公開講座**

2016年10月15日（土）にボーイズラブに関するシンポジウムを開催する予定です。詳細が決まり次第、ウェブサイトやチラシでお知らせします。

**GF読書会**

開始日：2016年4月14日～

曜日・時間：毎週木曜日13:00～15:00

（ただし第3木曜日は除く）

昨年度読んだ高群逸枝関連研究の補充と、憲法問題の学習会をした後、5月半ばから、広岡浅子の伝記（テキスト未定）を輪読する予定

**公開ブックトーク**

（共催：GF、GF読書会）

日時：4月23日（土）14時～16時

講師：加納実紀代さん

内容：「高群逸枝と母性主義」

場所：和光大学ジェンダーフリースペース

参加費：1000円　（要事前申込み）

＊GF読書会は、学内外を問わず、どなたでも参加できます。ただし、参加に当たっては、いくつかのお願いをする場合がございます。

＊ジェンダーフォーラムの活動に関すること、GF読書会に関することの問い合わせ先：　和光大学ジェンダーフォーラム　gen-free@wako.ac.jp（阿野）